



白菜のロゼット / バサ菜 冬を耐え抜く たくましい姿

右の写真は、冷たい強い風が吹きすさぶ畑。頬っかぶりです。鈴木サトさんが収穫しているのが「バサ菜」です。スーパーなどでは買えない、産直ならではの野菜かもしれません。わかりやすく言えば、ハクサイのできそこないですから。でもね・・・

*

ふつうに見かけるハクサイは、初秋に種をまき、たっぷりの肥料を効かして育てます。そうすると、冬を前にして、結球し、皆さんが知っている形になります。

ただし視点を変えれば、それはブクブクと過保護に育てられた肥満体なのです。冬の寒さには耐えられなくて、そのまま畑においたのでは凍みて腐ってしまいます。

*

いっぽう、種まきや定植が遅かったり、あるいは畑に肥料が足りなかったりすると、白菜は結球してくれませぬ。「効率的」な経営であれば、さっさと土にうない込まれるなど、廃棄処分されることとなります。

ところが、そのまま畑において冬を迎えると、ハクサイは結球とは逆に、ロゼット化(下記)してきます。それが「バサ菜」です。

*

ちょっと調べてみると、“ロゼットとは、「小さなバラ」という意味。多年生の草の、冬越しの形で、茎がなく、葉が地面にへばりつくように広がっています”などと説明されます。

緑の葉を幾重にも広げ、太陽の

光を体いっぱいを受けようとする、たくましい姿なのです。

このとき植物体内では、樹液濃度を高めて耐寒性を上げているため、厳冬期にも凍みたり腐ったりすることはありません。そして、それが食べたときの甘み、美味しさにつながります。

*

さて、ここからが本題なのですが、バサ菜という「できそこない」の強さ、美味しさを考えてとき、つい人間の成長に思いをさせてしまいます。

命のクルミ

イラクで米軍が使用した劣化ウラン弾の告発や旧ソ連の核実験場の取材などで知られるフォトジャーナリストの森住卓さんと久しぶりに会う機会がありました。

「生きていたんだねえ」

そんなあいさつが冗談でなく口をついてしまいます。香典の前渡し代わりになんて憎まれ口をたたきながら、自家製の「甘酒」をふるまったりしました。

その森住さんから、小粒のクルミをもらいました。

「何、この小さくてきたない実。どうしろというの？」

じつは・・・

2005年の秋、パキスタンのカシミール地方を大地震が襲いました。

ハクサイという商品作物だって、せっかちな育て方をしなければ、別の特性を見せてくれるのです。ましてや人間は棚に並べる商品ではありません。早く早くと追い立てて、ブクブクの規格品ばかりをめざすのではなく、もっと伸び伸び、ゆっくり見まもったら、たくましさや個性や、人としての輝きを身につけてくれるんじゃないかなぁ、と。

あ、いま畑では、ターサイが同じようなロゼット姿で濃い緑の葉を広げ、冬の太陽を濃縮しています。



森住さんは、その10日後に現地入りしたそうです。

被災した村で、あるお宅にお世話になりました。そこでは、畑が壊滅して麦の作付もできず、食べていたのがクルミでした。

その命の糧を、取材に区切りをつけ別れを告げる森住さんに、

「もう行くのか。これ持っていけ」と、両手にあふれるほどくれたというのです。小粒だけど重い重い、まさに命のクルミだった。